



大正大学講師 高橋秀城 (82)

春も中頃を過ぎて、梅から桜の季節へと移ってきました。寒々としていた近所の畦道にも、日に日に春の草花が芽吹いて、気づけば可憐な花の小道へと色変わりしています。

今年より
春知りそむる
桜花

散るといふことは
ならはざるなむ

〔古今集〕紀貫之
今年、初めて春を知った桜花よ、いつまでも咲いて、散ることは見習わないでほしい
日本のお花見は、古く奈良時代に遡ると言われています。貴族の間で行われていた梅見は、やがて桜見となり、江戸時代には広く一般にまで広がりしました。
現在では日本全国に桜

の名所があります。高尾山にも、「高尾山十景」として「丁平の桜」が挙げられています。麓よりやや遅れて、四月の中旬頃には、ヤマザクラやソメイヨシノの千本桜が圧巻の春景色を見せてくれるでしょう。

さて、この「今年より」の歌には、若木の桜が初々しく花を咲かせた、お祝いの気持ちも込められています。「習う」と「做う」が掛けられているように、いかは先輩の古木に教えられ従う時が来ても、今はただひたすらに元氣いっぱい成長してほしいと願います。四月に入り、新入学や新社会人、新たなスタートを切る皆さんにもエールとして贈りたくなる一首です。
花は根に

鳥は古巣に
帰るなり
春のとまりを
知る人ぞなき

〔千載集〕崇徳院
春が過ぎれば、花は根に、鳥は古巣へと帰るといふ。でも、春の行き着く先を知っている人はどこにもいない
思えば春は、足早にどこに向かっているのでしょうか。ひらひらと舞い散る花びらの捕らえどころがないように、それはただ散らす春風のみが知り得るのでしょうか。

仏教語に「散華」という言葉があります。その名の通り「花を散らす」ことで、仏さまを讃えて供養するために花を振り撒くという意味です。もともとインドでは、花や香を地面に撒いてその場を清めました。花には蓮などの花びらが用いられましたが、日本では多く蓮弁をかたどった紙製の花弁が代用されます。皆さまの中にも、大きな法要で僧侶が撒いた散華の



春も中頃を過ぎ、桜の季節へと移り変わる

花を持ち帰られた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。散り敷く花びらには、仏さまを深く敬う心が込められているのです。
桜の花をめぐっては、次のような話が伝わっています。
これも今は昔のこと。田舎生まれの稚児（寺院に召し使われていた少年）が比叡山に登って修行をしていました。
ある時、桜が素晴らしく咲いていたところに、風が激しく吹きつけてい

るのを見て、この稚児は涙をしきりに流して泣いていました。すると、その姿を見ていた僧がやさしく近寄り、「どうしてそうお泣きになるのですか。この花が散るのが惜しいとお思いですか。桜は儂いもので、このようにすぐに散ってしまいます。ただそれだけのことでありませんよ」と言って慰めました。
そうすると、稚児は「桜が散るのは、どうしようもないので辛くあり

折り折りの記 (116)

亀鳴くや高尾山の天狗踊りだす

波多野 重雄

「亀鳴く」というのは、「川越のどらの田中の夕雨に何ぞと聞けば亀の鳴く」という歌が典拠という。虚子の句に「亀鳴くや皆急なる村のものがある」。「亀鳴く」は疎かなようであるが、春の季節としては古くからあり、計り知れないロマンがある。私は高尾山に籠る夜、大天狗・小天狗が囁き合つて今にも踊りだしそうな風情を感じた。
「亀鳴く」という春の季語は模範とし象徴的でロマンがある。
一茶も「めでたさも中位なりおらが春」という。
(高尾山健康登山の会々々長)

贈新皇

皇太子殿備仁徳

博愛親交及万国

日本列島善男女

浩歌祝福期明息

厚木市 荒井一雄

「新しき時代」に非ずして

「皇の新しき時代」に期する

皇太子殿下は、

類希なる仁徳を備はれる…
博愛の親善外交は

万国(全世界)に及ばれる…
日本全国の善男・善女は浩歌し

(大声にて歌ひ)祝福し、
聡明なる天皇陛下の
「子息様に期する…」

ません。それよりも、私の父親が作った麦の花が、この風で散ってしまった。実が入らないのではないかと思ったり悲しいのです」と答えて、しゃくり上げながら「おいおい」と泣きまじら。本当に嘆かわしいことです。
(『宇治拾遺物語』)

これは教科書にも載る有名な説話です。稚児は桜吹雪の前で、さめざめと泣いていました。僧侶は、桜の散る定めを説いて慰めましたが、稚児は予想に反して、離れて暮らす父親が作った作物を心配して悲しんでいたのです。
話の最後に「うたてし」

(嘆かわしい、情けない)とありますが、それは何に對しての言葉でしょう。風流を介さなかつた稚児に向けての軽蔑かもしれませぬし、反対に、父の境遇を理解してなかつた僧侶に對しての不満かもしれませぬ。あるいは、お互いに分かり合えていないと、思っていた二人の擦れ違

春彼岸先師墓地参り

三月二十一日



いを囀った言辭でしようか。全ては読者の解釈に委ねられています。
ただ、桜の花も麦の花も、風が散らしていることには違いありません。二人の意識の方向性は異なつても、風によつてこの世の儂さを自覚していた点においては、共通していたと言えるでしょう。
飛花落葉の風の前には有為の転変を悟り、電光石火の影の内には生死の去来を見る

(三浦浄心) 『慶長見聞集』
〔風に散る花や紅葉に、この世の移り変わり(無常)を知り、きらめく瞬時の光に、生まれ変わりの輪廻を見る〕
桜は咲ききるからこそ散り際が美しいのでしよう。春風颯々たる穏やかな日和に、若木の桜の花びらを受けながら、力強く成長した初夏の新芽を探します。
(栃木北部教区普濟寺)